

1 学校教育目標 自らを、友達を、地域を大切に、 未来に向けて伸びゆく津保美の子の育成	2 本年度の重点目標 ①子ども同士の関わりのある教育活動を重視する。 ②教師が相互に指導力を高め合い、児童が楽しく分かる授業づくりを推進する。 ③児童に寄り添い支援することのできる生活指導、教育相談、特別支援教育を充実する。 ④ふるさとを愛する教育「牛津学」を推進する。
--	--

達成度 A:ほぼ達成できた
 B:概ね達成できた
 C:やや不十分である
 D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価
 ①子ども同士の関わりのある教育活動を重視する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○主体的活動の推進	児童会活動等の活性化	・集会活動や委員会活動等では、毎回児童の主体的活動の場を設定する。	・児童集会、代表委員会などにおいて児童が計画運営できるようにする。 ・児童の考えを生かし、活動できる場を設定する。	B	・児童集会・代表委員会で、児童が主体となり計画・運営することができた。 ・雨の日の過ごし方や、忘れ物を減らすための取り組みとして、生活反省表をチェックし、集計した。しかし、まだ教師の声かけが必要であった。	・児童一人一人が学校をよくしていこうという意識をもち、そのためのアイデアが出せるよう、月1回の委員会活動で考える場を設定する。 ・どのような方法を選択すればよいか投げかけ、児童に考えさせる。
教育活動	○異年齢集団による活動の充実	縦割り班活動の促進	・80%以上の子どもが縦割り活動のよさや6年生への感謝についての感想を残す。	・遠足・遊び等の縦割り活動の目的を明確にし、計画的に実施する。 ・活動後の感想、感謝の言葉を書かせる活動を行う。	B	・今回は、12月の人権集会で「友達のいいところを見つけよう(縦割り班の友達)」というテーマを入れてもらったので、全校児童が縦割り班の良さについて考えることができた。また、下級生の感想を掲示したり6年生にプレゼントしたりしたことで、さらによさを味わう機会になった。	・縦割り班遊びの場所として運動場も開放することで充実を図る。 ・朝の時間では時間が不十分だったため、土曜授業の1時間目などに組み込むことで満足に遊ぶ時間を確保する。

②教師が相互に指導力を高め合い、児童が楽しく分かる授業づくりを推進する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	教職員の意欲と資質の向上	・全職員が、年1回以上、他の教職員に授業を公開し、成果や課題を見出し共有する。 ・年3回以上、校内職員を講師とした研修会を開く。	・視点を明確にした校内研究に取り組み、指導法の具体的な蓄積を図る。 ・校内職員を講師とした研修会の実施により、職員の実践意識を高める。 ・校時表に、各部会や各種委員会の実施を位置づけ、課題の改善に向けた話し合いが計画的に行えるようにする。	B	・一人一授業を実践し、授業研究会を行うことができた。国語科については授業展開や話し合いの持たせ方等共通理解をし、実践した。	・これまで蓄積した研究の成果を実践しつつ、新たな課題について研究史、授業力向上を図る。
教育活動	●学力の向上	基礎基本の定着と活用力の向上	・県学習状況調査等で県平均を目指す。	・立腹、授業後の振り返りなどによる落ち着いた授業環境、学習規律の場作りを推進する。 ・「きらきらタイム」において、つづける力を明確にした問題づくりやできるまで繰り返す全職員参加の指導体制づくりに取り組む。 ・「つぼみタイム」で、話し合いの目的や視点を明確に提示し、話し合い活動を活性化させる。	B	・「きらきらタイム」では全学年、計算問題に徹底することで技能が高まった。 ・「お話タイム」では、モデルの動画を作成することで全学年が同じ進め方で行うことができた。15分の流れも統一しつつある。 ・国語科を中心に意図的・計画的に「つぼみタイム」を設定したので、話し合いが活性化してきた。	・学力の個人差が大きいため、内容や問題数を担任としっかり話し合って決めていきたい。 ・他教科でも積極的に「つぼみタイム」を設け、話し合いを活性化させることでさらに授業内容の理解を深めさせたい。
教育活動	○読書の推進	図書館教育の推進	・低学年は一人150冊以上、 ・中学年は一人100冊以上、 ・高学年は一人50冊以上借りるよう、読書習慣の定着と向上を図る。	・朝の読書タイムを週1回実施し教師も一緒に取り組む。 ・読み聞かせボランティアを活用する。 ・図書館祭りを実施する。	B	・朝の読書タイム、読み聞かせボランティアの活用、図書館祭りの開催などにより、目標の読書冊数の数値を達成することができたが、貸し出し冊数を多くすることのみを目指す児童が多かった。 ・つぼみ文庫を全て読破することができていた児童は1割程度であるが、取り組んでいる児童は多かった。つぼみ文庫にあることで、普段読まないジャンルの本に触れることができていた。	・読書の質向上のために、図書館の時間や読書タイムに読む本はジャンルを限定する。 ・読書ボランティアの方にも教科書に出てくる本を紹介して読んでもらい、関連読書につなげる。

③児童に寄り添い支援することのできる生活指導、教育相談、特別支援教育を充実する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	道徳教育や体験活動による豊かな心の育成	・年間指導計画にそった道徳教育を行う。 ・ふれあい道徳の授業公開をし、その趣旨を保護者に伝える。 ・計画的に体験活動を学習に取り入れる。	・各学年で体験活動を年間計画に位置付ける。 ・「特別の教科 道徳」の評価の在り方について研修を行う。 ・「命の学習」、性教育など、学校の心の教育の取組について、保護者に情報公開をする。	B	・ふれあい道徳や命の授業など、養護教諭や助産師を講師に体験活動を取り入れた。その際、学校便りや学校通信などで保護者へ参観を呼びかけたり実施内容を知らせたりするなど、情報発信することができた。 ・「特別の教科 道徳」の評価の在り方など引き続き職員研修に取り組んでいく必要がある。	・教科書や年間計画、指導や評価の手引き等をもとに、職員とのニーズに合わせた授業に役立つ研修を計画・実践していく。
教育活動	●いじめの問題への対応	相手を尊重し、認め合う仲間づくりの取り組み	・いじめの早期発見、早期対応に組織的に取り組む。 ・学級経営における支持的風土づくりに取り組む。 ・いじめをなくす意識を涵養する。	・Q-Uテストを実施、分析し、よりよい学級づくりの対策を講じる。 ・いじめ・命を考える日(毎月10日)と運動させた「月の心(作文)」アンケートを実施し、いじめの早期発見につなげる。 ・児童連絡協議会を毎月開催し、児童理解や対応の共通理解を図り組織で対応する。	B	・細かい記録をとり、臨時職員集合や児童連絡協議会で報告し、全校的共通理解を図った。 ・Q-Uテストやアンケート等を計画的に実施し、支援の必要な児童を抽出、個別の支援計画を立案するとともに対応策を講じた。 ・多数の案件が発生したものの、保護者や地域からの苦情等に組織的かつ迅速に対応し、無事解決することができた。 ・「月のめあて」の重点事項や帰りの会でのチェック項目の見直しを行った。 ・中学校との生徒指導上の連携を密に行った。	・生徒指導の視点に立った児童支援計画と開発的な生徒指導を実施したい。 ・保護者対応に関する研修会を行い職員共通理解を持ちたい。 ・児童連絡協議会の効率化を図りたい。 ・各事例や決まりに関して共通理解の保持のために小城市ポータルサイトの利用を考えた。 ・牛津中校区の連携を深化させる。 ・「月の心」の共通理解と保管について再考したい。

教育活動	○人権・同和教育	人権・同和教育の充実	一人1回以上、人権・同和教育の研修に参加する。 年間指導計画に基づき、人権教室の充実を図る。	「縦割り列車」「人権教室」等、年間を通した取り組みを行う。 「ほかほかこぼし」を奨励し、一人一人を大切にすることを育てる。 「なかよしの木」や「人権集会」を開催することで、人権意識の向上と充実を図る。	B	一人一研修を達成できた。 ・月1回程度、人権教室の実施ができた。また、子どもの作文を常設で掲示することができた。また、保護者向けに「にじ」を作成し、啓発を行った。 ・平和集会では、6年生の修学旅行の学びを発表することができ、各クラスで平和に関するあめを立て、掲示することができた。 ・「なかよしの木」の取り組みができなかった。 ・特活部と連携し、たてわり班での「いいところみつけ」を行うことができた。	・人権教室の内容の精選と、担当の複数化を図り負担を軽減する。 ・校内における役割分担をさらに再考したい。 ・「なかよしの木」など、子どもの目に触れる取り組みを行うことで、意識を高めた。
教育活動	○教育相談	定期的、日常的な教育相談の実施	保護者や児童のニーズに応じ、年間を通じて、一人あたり2回以上の児童との面談、3回以上の保護者面談、直接的な連絡を行う。	・「月の心」、年1回の「セルフエリティアムアンケート」、年2回のいじめアンケートと連動させた全児童との教育相談を実施する。 ・児童の登校状況を把握し、家庭との連絡・連携を図る対応体制を構築する。 ・スクールカウンセラーの計画的活用を図り、関係機関につなぐ。	B	・年2回の担任による全児童の教育相談の計画、立案を行い、実施してもらうことができた。 ・「気になる児童」、不登校傾向のある児童に対して、スクールカウンセラーとの面談を継続的に実施し、児童の精神的安定につながった。しかし、カウンセラーの来校日が昨年度より減り、継続児童の相談が後回しになってしまうことがあった。 ・教育相談（年3回）やカウンセラー一斉等を出し、学校の教育相談体制の啓発ができた。また、保護者の相談件数も増えた。 ・カウンセラーによる授業を3、5、6年生で実施できた。 ・部組、児童玄関で、級外や特別支援担任等による、児童への声かけ、遅れてくる児童への対応ができた。	・来年度は、年2回の教育相談の時間や期間を工夫して確保する必要がある。（4年生までは、図書室の時間と組み合わせるなど） ・「気になる児童」への教育相談の継続が今後も必要。 ・カウンセラーによる授業は、6年間で9回は受けられるように、実施学年を固定するなど計画して実施を続けたい。 ・学校での様々な問題行動も多く、家庭での関わり方等についてカウンセラーによる保護者向けの講演会を計画してはどうかと思う。 ・来年度も、朝、遅れてくる児童への対応が必要と思う。（特に、年度当初は、新しい学期にならなかつたり、1年生で泣きながら保護者に連れて来られたりする児童がいると思われる。）
教育活動	○特別支援教育	特別支援を要する児童の教育の充実	課題を抱えた子どもに対する共通理解を深め、専門機関との連携を通して、個に応じた指導・支援の充実を図る。 ・特別支援教育に関する児童への理解を求める場を設定する。 ・特別支援教育に関する保護者への周知の場を年間、2回以上設定する。	・月1回児童連絡協議会を開き情報を共有する。 ・困り感のある児童や学校への不適応状況が見られる児童のケース会議を行い、市児童センター等に相談し支援方法を学ぶ。 ・個人カルテを作成し、個に応じた指導・支援を継続する。	B	・月1回児童連絡協議会を受けケース会議を開き学校内外と課題連絡を密に取り、課題を抱えた子どもへの共通理解を深めた。 ・保護者に専門機関を紹介し、学校専門機関、保護者との連携を通して、個に応じた指導・支援の充実を図った。 ・特別支援教育に関する児童への理解を求める場を設定したが差別的な言動があった。 ・特別支援教育に関する話をPTA総会、新入生保護者説明会の折に紹介した。 ・児童の理解は進んでいるが、対象となる児童の増加で対応が難しいことが多い。	・保護者に広く特別支援を理解してもらい、差別的な見方を減らしていく。 ・事前の手立てと職員との連携した対応で児童の不適切な行動を防ぐ。

④ふるさとを愛する教育「牛津学」を推進する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○学校経営方針	本年度の学校教育目標の周知	保護者や児童の学校教育目標の認知度を80%以上に上げる。	・全校集会等で児童に対し、具体的な例を挙げ説明する。 ・「津の里学習(牛津学)」のケース会議を行い、市児童センター等を利用して、具体的に説明する。	B	・全校集会等で児童に対し、具体的な例を挙げ説明することができた。 ・学校だよりに必ずのせ、保護者への認知度を高めることに努めた。ただ具体的な取組については、まだ十分に周知することができていない。	・児童には、今後も引き続き具体的な内容を示しながら、繰り返し伝え、学校が一つになり、目標達成できるようにしていく。 ・学校だよりの中に、学校教育目標に関する具体的な内容を示し、保護者の関心を高めるようにしていく。
学校運営	○開かれた学校づくり	地域連携の促進	・教育活動に地域人材や外部人材を50人以上、授業時間数80時間程度、活用する。	・地域の学習材や地域人材、外部団体の効果的活用を各学年の教育活動に位置付ける。 ・「津の里学習(牛津学)」 ・PTAと連携した学習活動のさらなる充実を図る。 ・新たな学習サポーターの仕組みの構築に取り組む。	B	・総合的な学習の時間、生活科、社会科、家庭科、体育科等の時間に、積極的に地域人材を活用することができた。 ・公民館行事や牛津産祭等々の地域行事にも積極的に参加することができた。	・今後も地域人材を積極的に活用し、学習効果を上げていきたい。 ・地域行事に積極的に参加し、児童に地域の一員であることに気付かせていきたい。
学校運営	○情報発信	ホームページの充実	・ホームページの更新をこまめに行い、地域、保護者が見たくなるページの工夫を行う。	・学校の行事予定、学校からのお便り、学習状況等の更新を定期的に行う。	B	・学校便りなど定期的に変更した。 ・地域からの要望に応じてコンテンツを追加した。	・コンテンツやメニューの見直しを引き続き行いたい。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の推進、多忙感解消	・各分掌間の連携及び情報共有を図り、効率的な業務への取組を推進する。 ・時間外勤務の削減を図る。	・校務サーバー上で各分掌が情報共有を行いやすいように、フォルダ構成を工夫する。 ・タイムマネジメントを行うと共に、定時退勤日の確実な実施を行う。	B	・校務サーバー上で情報共有を行い、職員会議等の話し合いの場でのペーパーレス化を進めることができた。 ・計画的に業務を進めようという意識はあるが、業務量が多く、なかなか時間外勤務削減に至っていない。	・各週ごとの業務計画を立て、退勤時間を決めて業務に臨むようにする。
教育活動	●健康・体づくり	健康教育や食育等の実践	・授業実践を通して、健康な身体づくりや意識向上を図る。 ・朝食喫食率100%を目指す。	・スポーツチャレンジへの取組を促す。 ・学校栄養職員と連携して食教育の実践に取り組む。 ・保健衛生指導の充実を図る。(保健便り等)	B	・スポーツチャレンジの取組を学年クラスの実態に合わせて行うようにしたが、クラスによって取組状況に差があった。 ・学級活動、朝ごはん調査、食育便り、給食時間のひとメロ、給食委員会による発表等で、食の大切さを伝えたいが、朝食喫食率が低かった。 ・保健便りや保健委員会、かせ・インフルエンザや熱中症予防の呼びかけを行い、患者数は少なかった。また、つめ・ハンカチ・ちりがみの衛生検査を定期的に実施したが、衛生に関する意識が低い児童が多かった。	・スポーツチャレンジの参加を促すために、年度当初ごとの種目に取り組むのか、クラスの重点取組目標を決めて行うことで、取組回数を増やす。 ・朝食喫食率の向上と食事内容の充実を目指すために、啓発活動と食教育の実践の仕方を工夫し、継続する。 ・衛生に関する意識を高め実践につなげるため、衛生検査の方法の見直しや呼びかけを行う。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

学習面では、国語科を中心に意図的・計画的に話し合いの場「つぼみタイム」を設定したことで、話し合いが活性化してきた。思考の広がりや深まりに対する一定の成果も得られた。他教科でも積極的「つぼみタイム」を設け、話し合いを活性化させることで、さらに授業内容の理解を深めさせたい。「楽しく分かる」授業を目指して引き続き授業改善に取り組んでいく。
児童に寄り添いながら支援することのできる生活指導、教育相談、特別支援教育を推進してきた。児童連絡協議会等で困り感を持っている児童に対する共通理解を深め、専門機関との連携を通して個に応じた支援を行うことができた。次年度も道徳教育や体験活動による豊かな心の育成及び相手を尊重し、認め合う仲間づくりを組織的に、全ての児童にとって、生活しやすい学校づくりを行ってきたい。